ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「ニューラ、切り裂く！」

　先に動いたのは、神楽のニューラだった。真正面から、ヒトカゲに猛スピードで突っ込む。ここまでのヒトカゲの動きや、今の呼吸の様子から、ポケモンバトル歴が短いと判断した彼等は、炎技に焼かれるリスクを犯して接近してきたのだ。

「ヒトカゲ、近づかせるな！」

　雅也がそう叫ぶと、ヒトカゲはニューラに向かって火の粉を吐いた。小さな火の玉は少しずつ大きくなってニューラの顔面に向かっていくが、ニューラは顔で火の粉を受ける前に、体を捻らせる。火の粉はニューラの顔のそばを掠め、空に消えていった――刹那、体を捻らせたまま、ヒトカゲの目の前に着地する。だが、そんなニューラの目に、赤く熱を帯びたものが接近してくるのが目に飛び込んできた。

　再び吐かれた火の粉を、今度は仰け反って躱す。仰け反ると同時に、ニューラは左足を軸に回転してヒトカゲに回り込んだ。後ろからでは尻尾の炎が怖いので、回り込んだ先は真横である。

　そんなニューラの動きを察知して、即座に体を右に向けるヒトカゲ。だが、既に体にはニューラの両手の鋭い鉤爪が襲いかかってきていた。鉤爪をクロスさせるようなその動きに、ヒトカゲは咄嗟に、その腕を掴もうとする……が、その手は空をきる。

　だが、鉤爪の攻撃が自身の体にヒットしても尚、いや、したからこそ、ヒトカゲはスピードを失ったニューラの両腕を掴む。ニューラは接近しすぎて、鉤爪を最後まで振り切ることが出来なかったのだ。爪は、ヒトカゲの肩のあたりで止まっていた。

　意識が霞む中、ヒトカゲは大きく口を開く。横に動くことも、後ろに退くことも出来ないニューラは、目の前に迫ってくる赤い光から逃れることは出来ない。

　二匹の間で生まれた爆風は、凄まじいものだった。ニューラも、攻撃したヒトカゲでさえも吹っ飛び、ヒトカゲに至っては気絶している。まだ意識を保っているニューラでさえ、かなりのダメージを負っていた。

　そして何より、今の今まで、目の前で起きている出来事が全て夢の中の事だと思っていた雅也が、その強烈な爆風とその匂いで完全に目を覚ましたのだ。それ程の威力である。

「こ……ここどこ……？」

「森の中！　雅也、まだ勝負は終わっていないよ！」

　慌てて目を擦って呟く雅也に、神楽は叫ぶ。

「え……っ？　神楽、その格好……？」

「説明はバトルの後だよ！」

　目が覚め、ほとんど頭が混乱している雅也に、再び叫ぶ神楽。だが雅也としては、何故忍者のような格好をしているのかだけでも教えて欲しいと切に思ったが、目の前で気絶しているヒトカゲを見て、コホンと一つ咳払いをする。

「ごめんヒトカゲ。僕、さっきまで寝てた……」

　そう謝りながら、雅也はヒトカゲをボールに戻す。次のボールを取り出そうとした手が、少し滑った。

「なんでこんなことになっているかは分からないけど……聞きたいことは後でいいや。取り敢えず、さっきまで手に汗握るポケモンバトルをしていたのは分かった。リオル、ゴー！」

　改めてボールを掴み、それを前方へ投げる雅也。同時に、神楽とニューラが互の目を見て頷き合う。どうやら、神楽はニューラのままで、リオルと戦うらしい。

「ニューラ、切り裂く！」

　空中でボールから飛び出て地面に着地したリオルを見るやいなや、ニューラはまたもや真正面からリオルに突っ込む。ダメージを受けても尚、そのスピードは衰えていなかった。ここら辺は、流石といったところだ。

　だがリオルは、ボールの中からヒトカゲとニューラの攻防を見ていた。初見ならそのスピードに圧倒されていただろうが、今は目が慣れている。そして、このスピードへの対処方法も、既にリオルは思いついていた。

　両腕をぴったりと体に貼り付け、あっという間にリオルとの距離を縮めるニューラ。ニューラの顔とリオルの体の距離が四十センチを切った時、貼り付けていた腕を高く上げる。

　しかしその瞬間、ニューラの視界からリオルのすがた姿が消えた。

「ニューラ、下だ！」

　神楽のそんな叫び声がニューラに届く。リオルは体を屈めて、飛びかかってくるニューラの下に潜り込んだのだ。そして――

「リオル、はっけい！」

　お腹に強い衝撃を感じたと思ったら、いつの間にか、ニューラは空高く舞っていた。このまま落ちれば、間違いなく気絶することをニューラは悟る。衝撃のせいで体に痺れるような感じを覚えるも、必死であたりを見回し、何か掴めるような物が無いか探した。幸い、ここは森の中である。

　だが、何とか掴めそうな枝を見つけても、ニューラは体を動かすことが出来ない。どうやら、体が麻痺してしまったらしい。それでも必死で腕を伸ばしたものの、枝はその手をすり抜ける。そのままニューラは地面に激突した。

「……よくやった、ニューラ。戻れ」

　目を回し、気絶したニューラをダークボールに戻した神楽。そして袖の中から、最後のボールを取り出す。この時神楽は、背中にゾクゾクするようなものを感じていた。イトマル、ニューラが倒され、残るは一匹。相手のポケモンも、あのリオルで最後。身のこなしから、神楽はリオルが今までの雅也のポケモンの中で一番戦い慣れていると思った。

　それでも、神楽には勝算があった。今自分が出そうとしているポケモンなら、あのリオルを倒すことは不可能では無いと、神楽は自信を持って言える。だが同時に、一筋縄でいかないことも、感じていた。一瞬でも気を抜けば負ける、そんなギリギリの戦いが、神楽を否応無しに興奮させているのである。

　そして、それは雅也とリオルも同じだ。

「さぁ……雅也、行くよ！」

　そう叫び、神楽はダークボールを振りかぶった。